

【新学術領域研究（研究領域提案型）】

人文・社会系



研究領域名 グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて： 関係性中心の融合型人文社会科学の確立

千葉大学・法政経学部・教授

さかい けいこ
酒井 啓子

研究課題番号：16H06546 研究者番号：40401442

【本領域の目的】

現在、グローバル化の進行によって、国や地域を超えて共通・連動する諸問題が増えています。2014年シリア、イラクで台頭した「イスラーム国 (IS)」が、2015年にはその攻撃対象を欧米に、2016年には東南アジアに拡大していることは、過激武闘思想や非国家ネットワークがグローバルに広がっていることの一例でしょう。またシリア内戦の結果、数百万人の難民が欧州へと流入し、国際社会での移民、難民の救済と多文化共生社会の確立が、喫緊の人道課題となっています。と同時に、そのことは移民排斥の流れを生み、英国のEU離脱まで引き起こす要因のひとつにもなりました。また自然災害、感染症など地球環境の問題も無視できません。

こうした現代的諸問題が示すのは、20世紀までの主権国家とそれを軸とした国際社会という近代社会科学的「常識」が崩壊し、社会の安定と発展を確保してきた諸制度が機能不全に陥っているという、危機的な事実です。しかし、こうした「新しい危機」ともいえる事象について、分野横断的な包括的視座をもって分析した研究は、いまだ存在しません。

本領域研究が目的とするのは、ローカル・レベルからグローバル・レベルまでのさまざまな規模、レベルの主体間の関係が、情報や思想、モノやカネ、人の移動のグローバル化などによって常に変動し、相互に影響しあうことを踏まえて、実践的研究の新たなパラダイムと、それを生み出す研究体制を構築することです。そして、「新しい危機」とみなしうる人類全体が直面する現代的諸問題に対して、問題解決型の応用科学を構築することを模索します。

【本領域の内容】

本領域では、村落やマイノリティなど狭い範囲から、生態圏やグローバルな規範に基づく広い範囲まで、多種多様な関係性の変化と連動性をとらえるため、計画研究を関係性の広さに応じて設置しました。計画研究 B01「規範とアイデンティティ」は、伝統的社会紐帯意識に基づく地域共同体のアイデンティティを分析、それがいかにナショナルなアイデンティティに動員されたり、それを超越・分断して機能するかを解明します。一方で計画研究 A01「国家と制度」は、国際社会からのグローバルな影響や、宗教・民族間対立などの越境的な事象の広がりに対して、国家がいかにその領域主権国家性の維持を実現し、防波堤の役割を果たすか、そのメカニズムを解明します。計画研究 A02「政治経済的地域統合」は、政治経済的地域統合体のメカニズムを探りますが、国際機関、市民社会などの超国家的ネットワークや、国家主体内の多様なサブシステムが、地域統合にどのような影響を及しているかを解明します。また計画研究 B02「越境的非国家ネットワーク」は、内戦

や紛争の結果出現する非国家主体やその越境的なネットワークを分析、発生原因や国際政治における意味を解明します。最後に計画研究 B03「文明と広域ネットワーク」は、地球規模で共有される諸問題と諸現象が増加する今、その動的展開過程を分野横断的に研究し、グローバルな問題解決アプローチを模索します。



本領域では、人文社会科学の個々の学問的方法論を超えて諸学問の有機的結合を図るため、さまざまな学問分野と多岐にわたる研究対象地域を縦横に組み合わせて、共同研究を実施します。

【期待される成果と意義】

本領域研究は、今国際社会が直面する危機的状況をいかに解明し、その解法を探るかという、極めて社会的ニーズの高い研究です。さまざまな学問の壁を越えて、喫緊の課題に取り組む研究体制を確立することで、人文社会科学は一層問題解決型の、応用科学としての役割を果たすことになるでしょう。

一方で、日本の地域研究は欧米の敵国研究、政策研究から距離を置き、現地社会と直接研究交流を実践するなかで、研究対象地域に根差した研究を進展させてきました。その日本の地域研究の強みを存分に発揮すれば、欧米主体の社会科学を相対化し、グローバルな学問の地平を広げることが期待できます。途上国、紛争経験国出身者の中で、欧米型の人文社会科学に対して距離感を抱く者が少なくないことを考えれば、日本独自の新たな人文社会科学を現地の研究者に直接発信することは、日本の学問界が海外に展開する上で重要な戦略となるでしょう。それこそが、欧米中心の知の体系を転換し、流動化する現代社会に向き合う新たな学問の在り方なのです。

【キーワード】

地域研究、関係性、グローバル化、危機対応

【研究期間と研究経費】

平成 28 年度－32 年度

529,300 千円

【ホームページ等】

<http://www.shd.chiba-u.jp/gblcrss/>
gblcrss@chiba-u.jp



研究領域名 **パレオアジア文化史学—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究**

東京大学・総合研究博物館・教授 **にしあき よしひろ**
西秋 良宏

研究課題番号：16H06407 研究者番号：70256197

【本領域の目的】

約 20 万年前頃のアフリカ大陸で誕生したホモ・サピエンス（新人）は、10～5 万年前頃以降、ユーラシア各地へと拡散し、先住者たる旧人たちと「交替」した。本研究は、絶滅人類が生息していた頃のアジア（略称パレオアジア）における「交替劇」を文化史的観点から解析し、そのありかたの地理的変異や特質を実証的、理論的に論じることを目的とする。もって、生物学、ヨーロッパ中心の研究動向に新知見を提示し、より総合的な人類史理解に寄与する。

特に注目するのは、アジアでは「交替劇」進展の速度や先住集団との接触、交流の程度などに多様なパターンがあった可能性である。ヒトが交替したはずなのに石器文化が交替したようには見えない地域すら認められる。そうした可能性をアジア各地の広域的比較研究をとおして検証し、その意味を論じたい。

【本領域の内容】

研究は、物的証拠に基づいてアジアにおける新人の拡散と文化形成過程の具体像を復元する項目 A と、そこで明らかになった新人文化形成過程の多様性が生じた背景を理論的に説明する項目 B からなる。

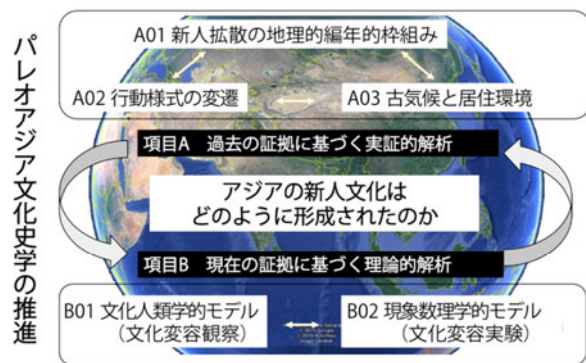


図 1 各研究項目の構成概念図

具体的には、まず、新人が各地に出現・定着し、旧人が絶滅した時期や経緯を考古学的・人類学的証拠を用いて定め（A01）、新人の定着と新人文化形成プロセスの地理的変異を明らかにし（A02）、そうした変異が特定の環境条件と相関して形成された可能性を解析する（A03）。これらの研究のためアジア各地で組織的な共同野外調査、文献調査を実施する。

そして、それら実証的記録で定義される「交替劇」の多様性を現代における文化人類学的理論と民族誌データから説明できないか（B01）、現象数理学的モデルで説明できないか検証し（B02）、アジア新人文化形成プロセスの特質を解明する。

【期待される成果と意義】

新人のユーラシア拡散、定着に関する研究はヨーロッパや西アジアを中心に成果が重ねられてきたが、近年、より東においても急速に新知見が蓄積されつつあり、それらを加えた総合的理解が求められている。本研究により、進展著しいアジアの新知見が集成・評価され、現時点での到達点が提示される。

本研究のもう一つの意義は、「交替劇」を、生得的能力が優れた新人が劣った旧人と交替した事件と説明して終えるのではなく、それを歴史のプロセスの一部としてとらえ、各地でその具体像を明らかにしようとする点にある。旧人・新人「交替劇」は現代諸集団間においても繰り返し起こった拡散、融合、消滅とは、どう違っていたのだろうか。また、なぜアジアにおいて、より多様な交替劇が想定されるのだろうか。これらの考察は、ヒトの種、ひいては我々現生人類についての理解を飛躍的に高めると考える。

【キーワード】

新人と新人文化：ここでいう新人とは解剖学的な現生人類、すなわち私たちホモ・サピエンス（ホモ・サピエンス・サピエンスともいう）のことである。従来、ヒトの生物学的系統は文化系統に対応し、新人には新人固有の、旧人（ネアンデルタール人やデニソワ人ら）には旧人固有の行動様式や文化が普遍的にあると考えられていた。しかし近年、「新人的行動」の一部が旧人に伴う例や、逆に新人に伴わない例が明らかになったため、生物学的系統とは別個に文化の動態を調べる必要が生じてきた。

このことが本研究構想の元となっている。ヒトと文化の交替劇を別に考えるとすれば、ヒトの交替にあって文化も新人のそれに置き換わったこと（交替）があったであろうが、旧人の文化的寄与が大きい地域もあったのではないかと（交流）。あるいは、旧人文化がそのまま新人に受け継がれたことはないのか（連続）。アフリカから遠く、かつ広大で自然環境も多様なアジアにおいて、そうした可能性を実証的、理論的に検証しようとするのが本領域研究である。

【研究期間と研究経費】

平成 28 年度—32 年度
664,800 千円

【ホームページ等】

<http://paleoasia.jp>